里見義著

和文軌範

巻一

公管書籍

里見義著

和文軌範

明治十五年十月五日版權免許

吾邦文章。借漢字行之。發源歌謠。所施甚寡。古事記萬葉集。其最古者也。祝詞宣命之典雅。書序物語之流麗。草紙日記之俊逸。皆足以見其卓絕之筆矣。近世洋書盛行。多用邦文譯之。其人率不

習邦文漢語故用字措辭動該格
法絕作非漢非和一種不可解之
文吗呼邦文之與莫古今異
吾友里見君義憂之勞搜古書
披沙揀金而其平易雅馴者以
為初學啟聞者簡與難解者

注釋之名曰和文軌範蓋邦文
本不一其體有叙事之文有論
說之文或寫景描情或記事載
行雲化多端整然不亂苟使初
學之士就此書熟讀成誦然
後推究文義尋繹章法其

於下筆綴文。乃綽ゝ乎不知其難
者矣。余竊望此書一出。世所謂
翻譯文字。斐然革其面目。以
成吾邦之真文章也。遂為序
之。明治癸未二月　學海居士
依田百川撰并書

凡例

○本邦文章の純粋なるものハ。祝詞宣命なんど詞高尚なり。又中古の物語等ハ意想を縦横に述たる者なれども尚耳遠し。當今學校用に供せんには。又一際下れる世の者に非ざれば適せず。故に此書は近古の文章を多く掲ぐ。但し古今の別なく解し易き文は。中古のものといへども編入す

○編中紀事序跋戦記日記。慶賀哀傷等。悉く編集すれども。初學の厭倦を恐れ。區別を建てず。或は

紀事序跋。或は雜體と混じて出す。

○文章ハ自然のものにて。抑揚頓挫首尾照應等の諸法ハ。各國同一なれバ。大凡ハ文章軌範の例に倣ひ。圏点○○○批点、、、或ハ字眼にハ●●等を用ゐ。且又文中小段落にハ『大段落にハ』等を附し初學の便に供す。

○和文には語を省き。又ハ常例に弛きて餘情を含ミたる等。平生の文法に違へるものあり。是等は初學の疑を解んがために。文の左傍に――線をひき。標註に趣意を断るべし。且又難語故事等ハ。其意味其出所。一々標註に掲ぐ。

○文章中古歌を挿みたる者あり。譬へバ源氏明石巻に。水雞の打敲きたる「誰が門さして」と哀に覺ゆ云々などなり。此は古歌を剪出したるをそのにて。續けてある時は語をなさず。故に「 」斯の如き鈎線を用ゐんとす。

○文章中冠詞あり言掛けの詞あり。梓弓春。久方の空。等は冠詞なり。難波江のよしあし。秋霧のおほゝしく。抔ハ言掛けなり。一々解釋せんを煩しくなれバ。‖斯の如き線を文の右傍に附す。

○古文といへども文法の如何にぞや思はるゝ所ハ。標註に論ずべし。又盛衰記等の顛倒文ハ。皆書下しに改む。

○送リ假名は。文部省編輯局中。用ゐる所の定則を踏ミ。儘ゝ取捨せる所もあるなり。

○書中傍に附する假名は。片假名を以てす。平假名ハ讀むに便あしければなり。

○又文中弖仁乎波を省きて。解しがたき所あり。此の如きものは。傍に小さく假名を振りたるもあるなり。

○戦記ハ平家物語太平記等あり。且又祝詞宣命等を掲ぐべきを。紙數限りあれば。後編に讓りて筆を止む。

著者　識

○世に傳ふる事とあるべきを傳ふ事とあるハ傳寫の誤りう ○劔ハ星の氣なり云云劔を星の氣に譬ふるハ支奈の書に白虹流星紫電などいふ名劔もあり又豫章記に斗牛之間有異氣是寶物之精上徹於天耳云云掘得二劔といふもあればなり ○劔ハ素盞烏尊得給ひてとあるハ神代記に尊の八岐大蛇を殺して得給ひしを誤

和文軌範巻之一

里見義　著

○神器　神皇正統記

北畠親房

三種の神器世に傳ふ事。日月星の天に在るに同じ。鏡ハ日の體なり。玉ハ月の精なり。劔ハ星の氣なり。深き習ひあるべきにや。抑彼鏡ハ中畧石凝姥の作り給へりし八咫の御鏡。玉ハ八坂の曲玉玉屋命作り給へり。劔ハ素盞烏尊得給ひて太神に奉られし叢雲の劔。此三種に就きたる神勅ハ

を納めていひたるなり

○神勅ハ神代紀の一書云因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穂國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壌無窮者矣已云云

○又一書云是時天照太神手持寶鏡授天忍穂耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡云云

正しく國を保ち給ふべき道なるべし『鏡ハ一物を貯へば私の心なくして万象を照すに是非善悪の姿顕れずといふ事なし其姿に隨ひて感應するを徳とす是正直の本源なり玉ハ柔和善順を徳とす慈悲の本源なり劍ハ剛利決斷を徳とす智恵の本源なり此三徳を翕せ受けずしてハ天下の治まらん事誠に難かるべし神勅明らかにして詞つゞまやかに旨廣し剰へ神器に顕ハし給へりいと忝なき事にや『中にも鏡を本とし宗廟の正體と仰がれ給ふ鏡ハ明を形とせり心

○こハ元日立春の大凡を述べまして云云といへるよりハ三條院の日出度様をいひ又春の御殿といふよりハ紫の上の御住居をいひて文を三段にし一層と深くいひたるなり

性明らかなれバ慈悲決斷ハ其中にあり又正しく御影を移し給ひしかバ深き御心を止め給ひなんぞかし』下畧

○初春　源氏物語初音の巻

紫式部

年立かへるあしたの空の氣色なごりなく曇らぬうらゝかさにハ數ならぬ垣ねの内だに雪間の艸若やかに色づきそめいつしかとけしき立つ霞に木の芽も打けぶりおのづから人の心ものびらかに見ゆるかし『ましていとゞ玉を敷け

○新古今春の上に西行法師とめこかし梅盛りなる吾宿をうときも人ハをりにこそよれ」とあるを冒頭と終りとに分ちていひたり

○書經旅獒云不作無益以害有益功乃成

る御前の庭より初め見所多く磨きまし給へる御方々の有様まなび（學）出んを言の葉足るまじくなん『春のおとゞ（御殿）のおまへことりわけて梅の香の御簾の中の匂ひに吹まがひて生ける佛の御國と覺ゆ。さすがに打解けて安らかに住なし給へる』（下略）

○尋梅といふ題を　松の屋文集

藤井高尚

とめこ（認來）かし梅盛りなるわの宿を」と何がし法師のいひけん様に情ある主もがな問ひて見むやとて片山かげをゆくに竹あめる垣しわたしてさる人のすみかならんと覺ゆるあり「立よりてのぞくに賤しげならぬ人松の柱に寄そひ梅の香をかしきを見出して「疎きを人は」と打誦しありけり。かくしもぞうれしき』

○無益の事　徒然艸上百廿四段

兼好法師

無益の事をなして時をうつすを愚なる人とも僻ことをする人ともいふべし。國の爲君のために止事を得ずしてなすべき事多し。其あまりの暇。

○杜甫詩に多病所須唯藥物微軀此外更何求

○四ハ衣食住医療也

いくばくならんば思ふべし『人の身に止事を得ずして營む所第一ハ食物。第二ハ著る物。第三ハ居所なり。人間の大事此三ツにはすぎず。飢ゑず寒からず風雨に侵されずして静に過すを樂しびとす』但し人皆病あり病におかされぬれば其憂へ忍びがたし。醫療を忘る可らず藥を加へて四ツの事求め得ざるを貧しとす。此四ツかけざるを富りとす。この四ツの外を求めいとなむを驕りとす。四ツの事倹約ならば。誰の人か足らずとせん』

○八月十五夜家にておの〳〵題を分ちて文作けるに山里の月といふを題にて　白求が花

○鳴弭の音旗手の靡きハ戦争をいふ

○商じこりハ商に凝るといはんが如し草木の盛に生長するを志こるといふ詞もあり

○古今集「山里ハ秋こそことにさびしけれ。鹿のなく音に目

加藤千蔭

耳に鳴弭の音をきかず。目に旗手の靡きをも見ぬおほん時世に逢ひては。何事につけても憂しと侘しと怨えかこつべき事やはある『されば世を避くとしもあらねど。商じこる市の巷に近き賑はしさを厭ひて。此山里には移ろひ住めるになんありける』「秋こそ殊に」といへる宜なる哉。籬の下に佇める小鹿松に木傳ふましらの聲も。獨ある人を慰さむるに似て憐なるに。茜さすは日

をさましつ」

を入りそて杣人の斧の響絶えて。端山のかひより月さし登るぞ。そがひの峯より落つる瀧つ瀬ハ黄金の色の絲引はへあらん如く岩に碎くる水ハ白玉をらき散らすかとぞ疑がはる。ひとへに清らかにして物に滯ふる事なきを吾心とハせん。と思ふに。比へてんものハ何ぞ。唯月と瀧津瀬との。』

○菅丞相の詩（著聞集巻四）

橘　成季

菅丞相。昌泰三年九月十日の宴に正三位右大臣の大將まて內に候ひを給ひける。

君富春秋臣漸老　恩無涯岸報猶遲

と作らせ給ひけれバ。叡感のあまりに御衣をぬぎてかづけ（纏頭）させ給ひしを。同四年正月に本院の大臣の奏事不實によりて俄に太宰權師に遷させ給ひしかバ。いかばかり世をうらめしく御憤も深かりけめども猶君臣の禮ハ忘れがたし魚水の節も忍得ずや覺えさせ給ひけん都のかたみとて。彼の御衣を御身に添へられたりけり。『はて次の年の同日斯くぞ詠せさせ給ひける。

○かづけハ衣を給ひたる時頭にかづき戴くの名にして都べての下さる物をもかづけ物と云なり
○本院ハ第の名時平公の居所也
○太宰師ハ親王がらの任にて府務ハ大貳の人務むるなり權師ハ昔大臣が左遷の時任ずる例にて一切府務なし
○三國志云孤有孔明。如魚之有水云云

○万葉集巻五太宰帥大伴卿宅にして梅花の宴を催し三十二人の歌を載せ并る序等ありて盛に梅花を賞美せし事あり

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

○二月ばかり山里の梅をめづる記　琴後集

村田春海

大伴の宿禰の主。今は塵のよのけがらはしきを逃れ。其遠祖なる筑紫のみこともち（帥）の古へを忍びいで。百千の梅を砌に根こじ移し。そを見て清き心の友となんなしける『こゝに吾思ふ友がきと相伴ひつゝ其花の盛りをも過さず。世の外の春をそこんなてふるさをへて訪ふ事あり『頃はきさらぎの十日餘りなれば彼のきゆる岡邊の雪も猶消残りながら。打霞む森の梢どもは。春の光うち渡りて。そこはかとなく聞ゆる鶯の聲も。人く（来）と厭ふなるもあらで。吾をよぶなる心地のすめるは心ゆく夕べなりけり。所は東の比叡の麓なるぞ。世離れてかごろに住ひなしたり『松のはしらぞ萱が軒いとたやぞさびたり。おのづからなる竹むらを籬に結ひ渡して。せき入るゝ水の流潔く。石のたゝずまひ殊更ならねどよしありて。庭の面いと廣らなるに。植添へたる千本の蔭は色に香にとり并べ

○古今誹諧歌「梅の花見にこそ来つれ鶯の人く〳〵といとひしもをる

て露を妬ミ霞にさふつゝみけむか此世のものな
しを覚えはべりけり』斯くて人々感でくつかへ
りつゝ花の下にまとゐをなせば主も酒肴とりま
かなひかはらけ（盃）とりあげて
「梅こそふるき宿なれどもそこら大伴の昔おぼゆる
宿なりけれ」とによび（吟）出たるを取あへず一人
ぐ、

「大伴の名もかぐはしき宿の梅の昔の春を忘
れやはする」かはらけ度々廻る程に月もれやう
にさし登りて木蔭も隈なくみゆるに吹くとし
もあらぬ下風に匂ひみちたるもゑひを勧むるか
だくの見なるが言ん方なし人々皆あざれいひて
あるは遣水（やりみづ）に口そゝぎて「呑ミての後は」と歌ひ
或は苔の筵にあまりて「雪を欺く」と口すさび出
るもあり又物（笛）の音（ね）にたちらしさるも花に後（おくれ）め
でたき調の名なるを折にあひつる心々何をかう
しかりぬるあしさまなり』いでやかく遊びの道
の楽しかるを世の羈されたる人こそやがて主のか
こゝろのなる哉花の心も志り思ふらんとぞ覚ゆ
る』されど今宵の有様をしも今日こぬ友に語

○三十二首中笠
沙弥歌「青柳梅と
の花を折かざし
呑ての後は散り
ぬともよし」
○又小野國堅歌
「妹が家に雪かも
ふるとみるまでに
こゝだもまがふ
梅の花かも」
○後追和する四
首の中「雪の色を
奪ひて咲る梅の
花今盛なりみ
ん人もがも」
○花に後るめく
さといふは落梅
の曲をいふなり

らまし。又後の思出ぐさまでとて月の光なきをともし火みてかつぐ物まかいつく』

○猿の智恵　著聞集巻二十

橘成季

承久四年の夏の頃。武田太郎信光。駿河國淺間のすそにて狩をしけるに。むれ猿を町中へ追出して面々に射けるに。三匹を殺し三匹をバ生捕にしてけり『其猿どもを家に歸りていけ（生）猿をバ繫ぎて。其前に死たる猿どもを置たりけるに。一匹の死たる猿をはなれずやゝ守りて其猿をひしと抱

○無慙ハ唯識論云何无慙不顧自法輕拒賢善為性云云

○語なしなりハ人の語なしなりといふ詞を省けり

付き頓て是ぞ死ける』己が妻なりけるとて有りけるにこそ。無慙なりける事なり。武田（名人なりき）があづかりしたる其狩に具したりて正しく見たりしとて語なしなり』

又同五郎信正が狩をしけるに。大なる猿を一匹。木に追登せて殺さんと志けるに。其猿指をさして物を教ふる體なり。人心を得ず怪しみて左右なくも射殺さでしばし見居たるに。尚頻りに指をさしければ。其指さしし方に人をやりて見すればバ。大なる女鹿一匹伏したりけり『あの鹿を射ヌ

○教へけるにこそあらめといふ詞を省けり

○書たりきといふべきをしと止めたるは事よなどいふべき餘情を殘せる文法也

○盛衰記ハ作者詳ナラズ林道春ハ葉室大納言時長ノ作ナルヘシト云ヘレド唯文章ノ保元平治物語ニ似タル故ノ事ナルベシ且又保元平治モ葉室時長

我を助けよとぞ教へけるにこそ。教へにつきて鹿をバ頻て射殺してけり。猿をハ免すべきに其をもやがて射てけり』信正折々この事のむざんに覺ゆるとて如法經を書たりしと。語り侍りけり』

○驛路鈴（盛衰記巻二十三）

貞盛以下勇士東路ニ打向ヒ遙々ト下リケリ』道スガラ樣々ヤサシキ事モ猛キ事モ哀ナル事モ有リケル中ニ。駿河國富士ノ麓野（スソノ）。浮島ガ原ヲ前ニ當テ清見關（ガ）ニ宿リケリ』此關ノ有樣。右ヲ望メバ海水廣ク湛ヘテ眼雲ハ浪ニ迷ヒ。左ヲ觀レバ

ノ作ナリトノ舊説アル迄ナリ故ニ著者ノ名ヲ載セズ以後モ此例ナリ

○浮島ガ原ハ駿河國富士郡ニ在リ

○漁舟云々杜荀鶴ガ詩ナリ

○駅鈴ハ少納言ノ掌ドル所ナリ職原抄云少納言只掌鈴印等事其職兼太政官中務省也云々

○軍行ニハ必ズ此駅鈴傳符ヲ申

長山聳連リテ耳松風ニ冷シ。身ヲソバメテ行キ足ヲ峙テ歩ス。釣スル海人ノ通夜（ヨモスガラ）浪ニ消エザル篝火世渡ル人ノ習トテ浮ヌ沈ヌ漕ケルヲ。軍監清原ノ滋藤ト云フ者。副將軍民部卿忠文ニ伴ヒテ下リケルガ此形勢ヲ見テ。

漁舟火影ハ冷メ燒ㇾ波　驛路鈴聲ハ夜過ㇾ山

ト云フ唐詩ヲ詠ジケレバ折カラ優ニ聞エツヽ皆人涙ヲ流シケリ』漁舟トハ漁スル船ナリ。火影トハ彼舟ニハ篝火ヲ焚ケバ諸ノ魚ノ集リテ取ラルヽナリ。冷メ燒ㇾ波ヲトハ水ニ移ラフ篝火ノ波ヲ

請テ旅行スルナリ令ニ云其正過所反駅鈴傳符並付行人自隨云云

燒ク樣ニ見ユルナリ。驛路トハ旅ノ宿ナリ。鈴聲トハ中畧馬ニ鈴ヲ付ケテ使ヘバ。終夜旅ノ馬山ヲ過ケルヲ斯ク云ヒケルナリ。貞盛朝献追討ノ宣旨ヲ蒙リ。山徒降伏ノ鈴ヲ給ハリ。此關ニ宿リタル折節。釣スル海人ガ篝火ヲ燒キテ魚ヲ取ル有樣。思ヒシラレケレバ斯ク詠ジケルニコソ』（下畧）

○手書くこと　玉かつま十四の巻

本居　宣長

万よりも手をよくかくはほしき業なり『歌よみ學問などする人は殊に手あしくては心劣りせらるゝを。それは何かは苦しからんといふもひとわろく理なき（然）ことなりかし。猶飽かず打あまりぬるこゝちぞするや』宣長いと拙くて常に筆とる度毎に。最口惜ういふがひなくおぼゆるを。人の乞ふまゝに面なく短冊一ひらなど書出て見るにぞ。我ながらだにいとかたくなに。見苦しうかたくななるを。人いかに見るらんと恥かしく胸いたくて。若かりし程になどて手習をせざりけん。といみじうくやしくなん』

○榎木の僧正　徒然艸上四十四段

○公世ハ閑院末流八條相國實行末葉なりといへり

兼好法師

公世（きんよ）の二位のせうと（兄人）に良覺僧正と聞えしハきはめて腹あしき人なりけり『坊乃傍に大きなる榎木のありけれバ人えのきの僧正とぞ言ひける。此名然るべからずとて彼の木を切られにけり。其根のありけれバ切株の僧正といひけり。いよ〳〵腹立ちて切くひをほりすてたりけれバ其跡大きなる堀にてありけれバ堀池の僧正とぞいひける』。

○遠島御歌合序（扶桑拾葉集巻十一）

○桑門は僧の事なり又沙門ともいふ風雅集序を思ふ闇をぞ迷ふ桑の門うき世にかへる道はなくてぞ」

○九品ハ上中下に各三品三生ありて九品浄土といへり源氏若菜上に十万億土の國へ隔てたる九品の上の望を疑な一云ゝ

○富の小川ハ皇統をいふ又は歌のくろう斑鳩

後鳥羽天皇

凡歌を判する事は道にとりて免されたる者を撰びて難波のよしあしを分ちわかつ海の深き浅きを定めしむ。花の都は昔わづかに三十一字の詞を聯ぬといへども桑門の今三拜九品のつらなれる隙なりければ富の小川の流れをくむことなく。和歌の浦岸を隔て十年あまり六年は春を送れり』更に此道を弄ぶまなかりしかど従二位家隆は和歌所の衆。新古今の撰者なり。八十餘の命は露いまだあだし野の風に消果てぬ程に彼れを

や富の小川の絶ばこそ吾大君の御名は忘られめといふ本歌あり

○六義ハ風賦比興雅頌なり古今集ニハ添へ歌數へうた。なずらへうた。たとへうた。たゞ言歌祝ひ歌。の六をいへり

○八代集ハ代々撰集ありし歌集なり所謂古今集。後撰集。拾遺集。後拾遺集。金葉集。詞

召具して今一度思々の詞をあらそひ品々の辭をからしべんとおもふ。此によりて雁の玉章のたよりにつけて疎からぬ輩に十題の歌を召あつめて。書つがへぬる人の數廣きに及ばざれば。昨日（キノフ）今日（ケフ）始て六義の題を學ぶ輩もさつきまいる忍ぶの森のことの葉を風にちらんこと。かゝる憚（リ）多くはべれども。且は執心の障をのぞかんがため。人の謗を省みず。此歌愚老をもて家隆にあへること道にそむくはべれど。然るべきにもあらねども石上ふりにしためしを伴ひて。殊更に是をはからへ

華集。千載集。新古今集なり

○うつくしきハ美麗なるものをめぐし憐む心なり

『また。抑八代集の歌を昔時々見侍りしうちぞ。面影もほのかながら尚明らかなれば。況や近世の人々の歌の中まで。十餘年の間を一首も聞及ばざれバ。譬ひ同歌を讀めらんをこそ見とがめ難く侍る。然のみならず六十の齡老耄ことわりに過ぎたれバ。只うちべうこゆる姿だくのまちをおろ〳〵註し侍りぬ』

○うつくしきもの　枕草子

清少納言

三つばかりなる乳兒の。急ぎてはひくる道に小

○尼にそぐといふは髪をきりて尼のごとくそぎたるなり

○あからさまなるは假初なり

さて塵などありけるを、目ざとに見付けて、いとをかしげなるおよび（指）にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし『尼にそぎたるちごの目に髪の掩ひたるを、かきはやらで打傾ぶきて物など見たる、いとうつくし『中略　おほきにはあらぬ殿上童の、さうぞき（装束）立られてありくもうつくし『をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつく（愛）しむ程に、かいつきて寐入りたるもらうたし『ひゝな（雛）の調度『蓮の浮葉のいと小さきを池よりとり上げてある『葵の小さきもいみじううつくし『何も〳〵小さきものはいとうつくし『甚じう肥えたる兒の二つばかりなるが、白う美くしきが、二あゐの薄物などきぬながくて、たすきあげたるが這ひ出くるもいとうつくし『八つ九つばかりなる男子の、聲をさなげ（幼）にて書よみたる、いとうつくし『鷄の雛の足たかに、白うをかしげにきぬ短かなる樣して、ひよ〳〵とかしかましく鳴て、人のしりに立てありくを、又親の許に連立ありくもうつくし『下略

○二あゐは赤花青花の二をもて染たる物といへり

○たすきといふは古へ小兒の衣類の襷をかけたるが如くなりしなるべし

○くゝり（縛）の鹿　著聞集巻十六

○かりまたハ鏃にて雁股と書り雁の蹼あるがごとし

橘　成季

前大和守時賢が墓所ハ長谷といふ所にあり『そこに留守する男わなをかけて鹿を取りける程に或日大鹿わなにかゝりける。此男が思ふ様わなにかゝりて取りたらんいと念なし射殺したりといひて弓の上手なりし人に聞かさんと思ひてわなにかけける鹿に向うて大かりまたをはげて射やりたる程に其箭鹿にも當らずしてわなにかけたりけるかづら（葛）にあたりたりければ。鹿は事故なく走りて迯（ゲ）行きにけり『此男頭がきつをきてまどへど更に益なし』

○舊都月（盛衰記巻十七）

後徳大寺左大將實定ハ舊都ノ月ヲ戀ワビテ。入道（清盛）ニ暇ヲ乞ヒ都ヘ上リ給ヒケリ『中畧　彼方此方ヲ見給ヘバ空シキ跡ノミ多ク適殘ル門ノ内行通フ人モ無ケレバ。淺茅ガ原。蓬ガ杣ト荒果テ鳥ノ臥所ト成リニケリ『八月半ノ事ナレバマダ宵ナガラ出ル月。主ナキ宿ニ獨住ミ。折知リ皃ニ鳴雁ノ音サヘツラク聞召ス。大將ハイトヾ哀ニ堪ヘズシテ大宮ノ御所ニ參リ。侍宵ノ小侍従ト云

○コハ福原ヨリ今ノ西京ニ歸リテ見給ヒシ様ナリ

○新千哀傷。「別レニシ秋ハ程ナク廻リキテ。時シモアレトサゾ慕フラン」

女房ヲ尋ネ給フ（中畧）侍從出逢ヒ請入レ奉リテ。良久シク御物語申シケリ「サテモ宮ノ御方ヘ角ト申サレヨト仰ケレバ侍從參テ御氣色ヲ伺ヒ進ラセケリ。宮斜ナラズ御悦有リテ此方ヘト仰ケリ。大將南庭ヲ囬リテ彼方此方ヲ見給フニモ。昔ハ二代ノ后ニ立給ヒ百鋪ノ大宮人ニカシヅカレテ明シ晩シ給ヒシニ今ハ幽カナル御所ノ御有様。軒ニ垣衣（ツタ）繁リ庭ニ千艸生ヒカハス。言問フ人モ無キ宿ニ荻吹ク風モ騷ガシク。昔ヲ戀フル泪トヤ露ゾ袂ヲ霑シケル「時シ有レバ」ト覺シクテ蟲ノ怨絶々ニ草ノトザシモ枯レニケリ「大將哀ニ心ノ澄ミケレバ。庭上ニ立ナガラ古詩ヲ詠ジ給フ。

○霜草云々白樂天詩

○優婆塞ハ名義集ニ信士男ト譯

霜草欲レ枯蟲思苦　風枝未レ定鳥栖難

ト宣ヒテ其ヨリ御前ニ參給ヒケリ「八月十八日ノ事ナリ。宮ハ居待ノ月ヲ待侘ビテ御簾半バ巻上テ御琵琶ヲ遊バシテ渡ラセ給ヒケルガ。山立出ル月影ヲ尚ヤ遲シト思シゲニ。御琵琶ヲ指置セ給ヒツヽ御心ヲ澄サセ給ヒケリ。源氏ノ宇治巻ニ優婆塞ノ宮ノ御女。秋ノ名殘リヲ慕ヒカネ。明

セリ俗人ノ信者ナリ

○大床ハ長押ノ下ノ低キ所ナリ大ナル家作ハ鋪居迄ノ間ニ長押ト云フモノ有リテ其下ハ一段低シ即チ大床ナリ此書巻十三ニモ長押ニ尻カケ大床ニ足サシ出シ云々トアリ是ナリ

月ヲ待出デ琵琶ヲ調ベテ通夜心ヲ澄サセ給ヒシニ。雲隱レタル月影ノ頻テ程ナク出ケルヲ猶堪ズヤ覺シケン。撥（バチ）ニ招カセ給ヒケン。其夜ノ月ノ面影モ今コソ思召レケレ」大將參テ大床ニ候ハレケリ。大宮ハ琵琶ヲ引サシテ撥ニテ其（ソ）レヘト仰ケリ。其御有樣アタリヲ拂フテ見エ給フ。互ニ昔今ノ御物語アリ。大將ハ福原ノ都ノ住憂キ事。語リ申シテ泣レケレバ。宮ハ平ノ京ノ荒行事仰出シテ共ニ御涙ニ咽バセ給ヒケリ。斯テ夜モ痛ク更ケヽレバ。后宮ハ御琵琶ヲ搔ヨセサセ給ヒテ秋風樂ヲ引セ給フ。侍從ハ琴ヲ引ケリ。大將ハ腰ヨリ笛ヲ取出デヽ。平調ニ音取リツヽ遥ニ是ヲ吹キ給フ。其後故郷ノ荒行ク悲シサヲ今樣ニ造リテ歌ヒ給フ。

「古キ都ヲ來テ見レバ淺茅ガ原トゾ成ニケル。月ノ光ハ隈ナクテ秋風ノミゾ身ニハシム」ト三返歌ヒ給ヒケレバ。宮ヲ始メ參ラセテ。御所中ニ候ヒ給ヒケル女房達。折カラ哀ニ覺エテ袖ヲソ絞リケル」

○子日御幸奉ル㆓和歌㆒序ヲ　扶桑拾葉集巻三

○王充論衡云太平之世五日一風十日一雨風不鳴枝雨不破塊雨必至夜

○孟子老吾老以及人之老幼吾幼以及人之幼

平　兼盛

我君年頃民を恵ミ國を治めおはしましゝて御政かず多くて山に登り水に戯れ給ふ大御遊びも見えざりしに西なる小倉山の秋乃紅葉徒らに其色を失ひ。東なるむらさい（紫）野の春は梅空しく其蔭を失ない。岸乃ほとり水清うすミ。山の聲高うよぶふ風も枝をならさず雨も土塊（ツチクレ）をやぶらじ。世の中は樂しくまさぞ今日の行幸をあふぎ奉り。限りなき吾君のおふんこくを老ふるはおのくるを悦び若きはわかきも我よりと云ふ。世の中は樂しき事は人の行幸をためしとすべしと告げ志めしく其日の和歌。

「子の日してよの榮ゆべきためしにも。人々のみゆきをよにも残さん」

○摩耶經偈云譬如旃陀羅驅羊就屠所歩々近死地人命復不過之云云抱朴子にも出づ

○撰集抄序　扶桑拾葉集巻七

西行　法師

生死の永き眠いまだ覺やらで。夢にのミふちまろゝ。水は面乃月を實とおもひ。鏡の裏の影をなふと深く思ひいれて。明暮はたゞ妄心のミ打はらひて。生死の船をよそはれして。屠所の羊は

○鳥邊野船岡ハ西京の火葬地なり愛宕郡にあり
○九品の解ハ前にいひたり
○八十すかたハ八十隨形好の事なるべし觀無量壽經ニ曰是心即是三十二相八十隨形好なり是

歩ミハ我身の外にどそわけれ。鳥邊野船岡の煙をよそにみて。過しつる四十餘年の霜を頂き。行末しらず今日に志ゐやあらしんける同じ夢の中に遊びまうそ。しんきう（深宮）に賢こき跡を撰び求めける。言の葉をかきあつめ撰集抄と名付ゐそて座の右におきそて。一すぢに智識と頼まんとなり』本ハ九品浄土におもひあてゝ。十に一を本とし。事ハ八十なるかうに思ひよそへて百に二十を残せり。抑凡夫のならひ明眼しひて真月をうらバ。たんまう（誕妄）の利剣おこらざるりのなり。されバ偏、

心作佛云々
○此ハ夕霧の君の文章生ニて試ミをうけ給ふ所なり
○又々と云ハ前ニも文作ることのありし故なり
○上達部ハ三位以上殿上人ハ昇殿を免さるゝ人を云なり
○講ずると云ハ

ゑ冥助を仰ぎ奉らん爲ニ。巻ごとに神明の御事をあらしのせ奉り侍り』

○學文（源氏をとめ乃巻）

紫　式部

博士才人どもを召して。又々文作らせ給ふ。上達部（カンダチメ）殿上人もさるべき限りをバ皆とゞめ候はせ給ふ。博士の人々ハ四韻ならぬ人ハ大臣（オトゞ）（源氏）を始め奉りてぜく（絶句）作り給ふ』興ある題の文字えりて文章博士たてまつる。短き頃の夜なれバあけはてゝぞ講ずる。左中辨講師つかうまつる。形いと清げ

所謂朗讀することなり

○高き家に生るとは夕霧のことなり

○窓のほたるとハ晋の車胤ガ故事にてほたるを集めて書をよミしなり枝の雪とハ孫康がことにて雪に映じて書をよミしなり

なる人のこわ（聲）づかひ（遣）物々しく。神さびて讀みあげたる程。いみおもしろし。覺え心殊なる博士なりけり』かゝる高き家に生れ給ひて世界の榮華にのみ戯れ給ふべき御身をもちて窓の螢を睦び枝の雪をならし給ふ志の勝れたる樣を。ことによそへなぞらへて心々に作り集めたる。句毎におもしろく唐土にももて（持）渡り傳へまほしげなる世の文どもなりとなん。其頃世に愛（メデ）ゆすりける。大臣のおほん（大御）は更なり。親めき哀なる事さへ勝れたるを。涙おとして誦し騒ぎしかど。女のえしらぬことを。學ぶはあしきことをと。うたてあまるぞ洩しつ』。下畧

○女のえしらぬことゝ云ハ作者の卑下の詞なり又うたてハ餘り甚しければなどいふがごとし

○可咲ハ賞美セル詞ナリ

○藤衣ノ歌（今昔物語巻廿四）

源　隆國

今ハ昔。左近衛中將ニ藤原道信ト云フ人有リケリ『法住寺ノ爲光朝臣ノ子ナリ。一條院ノ御時ノ殿上人ナリ。形有樣ヨリ初メテ心ハイト可咲（ヲカシ）クテ和歌ヲナン微妙（クハ）シク讀ケル。未ダ若カリケル時ニ父ノ大臣失セ給ヒニケレバ。歎キカナシムト云ヘドモ甲斐无ク強ヒテ墓无ク過テ。又ノ年

○拾遺哀傷ニ出ヅ

○同哀傷

ニ成リタレバ哀ハ盡セヌモノナレドモ限リ有レバ。服除トテ道信中將此クナン讀ケル。

「限リ有レバ今日ヌキ捨テツ藤衣、ハテナキモノハ涙ナリケリ」。ト云フテゾ泣キケル。亦此中將。殿上ニシテ數（アマタ）ノ人々有リテ。世ノ中ノハカナキ事ドモヲ言フテ。牽牛子ノ花ヲ見ルト云フ心ヲ中將カクナン。

「朝皃ヲ何ハカナシト思ヒケン。人ヲモ花ハサコソ見ルラメ』

○隨時樓の記　琴後集

○つぎ〴〵しハ時に似つかはしき意なり

○すさまじきハ時過ぎて荒涼なるさまなり故に網代ハ冬の物なりしらかさねを夏のものなるをそれを春の網代八月の白重といひ

村田春海

空蟬の世の人の事業。萬にさま〴〵なれど。時に背き折にあはで。つぎ〴〵しからざらんは。甚しき節（ヲリ）なりそをいはで心のゆく業なるべし』されど夏の日な埋火乃暖なるをおもはず。冬のよにひ（氷）みづ（水）乃涼しさをバ忘れつべし。古への人も春の網（ア）代（ヂロ）。八月のしらかさねをこそ。すさまじきことの例には引出られけれ。かゝれどはかなきすさびも。折にあひたるはをかしく。見所なき草木も時を得たるは珍らかになん覺ゆる』しかはあれど

さらなり枕草紙にいでたり

人がちなる衢の所せく門立并べたらん當りにぞ。時を過し折を失ふ類ひ多くて。月はたよりよきも花にうとく。水によしあるも山遠くて四の時乃行過るに隨ひて心をやるべき住ひをいとなむし難し』や。こゝに前田主の高樓こそ怪しく所得てぞ覺ゆれ。後へは市路につゞく物から。前ハ世離れたる望あり。春はむかつ尾の花の香りを居ながら袂にしめ夏ハ水際きよき池乃蓮を船ながら手折り。秋ハ月に嘯き。冬ハ雪に歌ふぞ。すべて山水の憐を添へざるなんあらざらんや』。まして主のことの葉もて友に交らふこと廣くなれば。時にかなひ折を過さず。くる人々これ風流（ミヤビ）好まれたるなれし。かくことしへに飽くよしをしらぬ高樓なれば。閑中大德の殊さらに。時に隨ふてふことをもて名付られたるハ。深き心あるらひなこそありけらし』。

○隨時ハ易經云隨大亨貞无咎而天下隨時云々

○高名の木のぼり　徒然艸上百九段

兼好法師

高名の木のぼりといひしをのこ（男子）。人をおきて（掟）て高き木に登らせて梢を切らせしに。いと危く見

○上臈下臈ハ元来官位ある人の事にて殊に女に多し女房に上臈中臈下臈などあれど此頃よりハ下臈といへバ賤しき者の事にな

えし程を言ふことぞなくて。下るゝ時に軒だけばかりになりて。過ちすなこゝろしておりよと詞をかけ侍りしを。かゝる所にありてハ飛び下るともおりなん。いかにかくいふぞやと申侍りしかば。其事に候。目（眩）くるめく枝危き程ハ己が恐れ侍れバ申さず。過ちハ易き所になりてかならず仕ることに候といふ。あやしき下臈なれども聖人の戒めに叶へり。鞠もかたきところを蹴出してのちやすくおもへバかならずおつと侍るやらん。

あそり
○同上百十段

双六の上手といひし人に。其行ひをとひ侍りしかば。勝んと打つべからず。負じと打つべきなり。何れの手か疾く負けぬべきと案じて其手を遣はずして。一ッ目なりとも遅くまくべき手につくべしといふ。道を知れる教へ。身を脩め國を保たん道も亦しかなり。』

○橘ハ垂仁の御世に田道間守と云人の外國より求めかへりて植

○古へより後世のまされる事　玉かつま（六の巻）

本居　宣長

古へよりも後の世乃勝れることぞ。萬の物にも事にも多し。其ひとつをいはんに。古へハ橘を並び

ーむかし古昔感て
ーものなり

ちかきそのかみまで感でけるを。ちかき世になる。蜜柑といふものありて。このみかんにくらぶれば橘ハ數にもあらずけおされ（氣押）たり『其外柑子柚くねんぼ。だい〳〵。の類多き中に。蜜柑ぞ味ことに勝れて。中にも橘によく似て。こよなく勝れる物なる。この一ッにて推量るべし。『或ハ古へにはなくて今なれるものも多く。古へハわろくて今のはよき類多し。』是をもておもへバ今より後も亦いかなりあらん。今に勝れる物多く出來べし今のこゝろにて思へバ古へハ萬に事足らずあかぬことお

○大津浦戸土佐國にあり
○國ハ土佐國なり

かゝりけん。されど其世にハおのづからやありけん。今より後も亦物の多くよきが出來んよになる。今をもちて思ふべからず。今の人事たらずとハ覺えぬなるべし』

○土佐日記

紀貫之

廿七日大津より浦戸をさしてこぎいづ『かくするうちに京にて生れし女子。（うせてイ）國にて俄に失にしかバ。此頃の出立いそぎをみれど何事もい（えいもせぬイ）はず。京へかへるに女子のなきのみぞ。悲しくこふ

○鹿子崎ハ大津の并びに在りとぞ
○守のはらからハ今の土佐乃守の兄弟なり
○なにぞは抔（ど）なり

ふる』ある人々もえたへず此間にある人の書き
ていだせる歌
「都へとおもふも物の悲しきハかへらぬ人の
あればなりけり」
又ある時には
「あるものと忘れつゝ尚なき人をいづらと問
ふぞ悲しかりける」といひける間にかこのさき
といふ所に守のはらから（同腹）又其人これかれ酒な
にぞもて追ひきて磯におりゐて別れがたきこ
とをいふ』かみの館の人々の中に此に来る人々

○口網ハ歌をよミ出す口づさを海邊ゆゑに口網といひなしたるなり
○もろもちハ諸共に恥をも思ひ得ばおもひくによみいでつるん
○荷ひ出せるといふも網の縁を以て辛らくしていひ出たるをいへるなるべし
○ゆく人ハ貫之なり
○己しのしハ助字なり

ぞ心ある様にいはれほのめくかく別れがたく
いひて彼人々のくちあみも諸もち（もイ）にてこの海
邊にて荷ひ出せる歌
「をしとおもふ人やとまるとあし鴨のうちむ
れてこそ吾ハきにけれ」といひてありければい
といたくめでゝゆく人のよめりける
「棹させど底ひもしらぬわたつ海の深き心を
君にみるかな」といふ間に楫取ものゝあはれもし
らで己し酒をくらひつれば早くいなんとて
しほみちぬ風も吹きぬべしと騒げば船に乗り

○甲斐歌ハ萬葉に「甲斐がねをね越し山越し吹風を人にもがもやことづてやらん」といふあれバ此歌時に相應せるゆゑにいへるなり

○杜子通典云有虞公善歌能令梁上塵起

○列子云撫節悲歌聲振林木響遏行雲

なんとは。此折にある人々をりふしにつけて唐歌ども時に似つかはしきをいふ。又ある人西國なれど甲斐歌などいふ。かく謳ふに船やかたの塵も空行く雲も漂ひぬ。とぞいふなる。こよひ浦戸に止る』藤原時實橘季平殊人々を追ひきたり』

○遠物を寶とせず（徒然艸百廿段）

兼好法師

唐の物は藥の外はなくとも事かくまじ。書どもはこの國におほく廣まりぬれば。かきも寫してん。諸越船のたやすからぬ道に。無用のものどものみ取積みて處せく渡しもてくるいと愚かなり。遠き物を寶とせずとも。又得がたき寶を尊とまずとも。文にも侍るとかや』

○尚書旅獒云不寶遠物則遠人格

○老子云不貴難得之貨使民不爲盗

○蓮を栽る説（閑田文艸　在洛南金鈴庵日著之）

伴蒿蹊

庵の坤此かたに池あり。元を心して作られたる様なるを。情ある人の假住ひしけるかにや塵にうもれ湊となりて有り』過し秋こゝにうつりて蓬むぐらかき拂ひおし流いで。此池なしをさむべかりしを事繁くて打すぎぬ。冬はかきこ

○晋慧遠法師居廬山東林寺與十八賢同修浄土名白蓮社
○周子愛蓮說云蓮花之君子也愛同予者何人云々
○僧正遍昭うた「蓮ばの濁りに志まぬ心もて何かハつゆを玉とあ

ありて乃ことなるをバ心えよとバこのかゝるなん思起して水湛へ蓮うゑんとす。抑これもまた佛の道にある妙なる法の譬として。樂しき我極樂國にしやうごん（莊嚴）にも一ツ乃ものとして解りまつるや。うつくしくあるを。故晋に遠法師も蓮社の交をむすぶ。儒の人にして翫びあへる宋に周子はじめはやはちすを花の君子なるものといへるが尚葉におく露の光あるを潔き操にはあらざるべかりけり。「何かは玉と欺く」と讀まつるは惟戯ことのみ。かく何のうちにつけてそれてなされて譬ある

ざむく」
○なんの詞語格違へり「なん」の繫詞あればなるとむすぶべし
○論語云子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜
○孟子云孔子登東山而小魯登大山而小天下云々

ものなきぞ。今我が植うるもおもふ所ありとや らえん。彼をおそひ此を悦ばぬにもあらねど。誠はちすこそくすしきすぢを引かくるなれば。此庭のうちは梅櫻あり萩楓ありて春秋のこのみどりしかはれぬるを。夏はうかぶるさの何のみぞなん「むかしの様に返すのこゝちす』。凡物にふれて自らを戒め人を教ふるは賢き人の常にして器物の銘ぜるはさらなり。くじ（孔子）ひじりは水にのぞみては逝者はかくの如きの歎きあり。山に登りては魯を小しとなりとしたまふ思ひあり。[illegible]

○聞ゆるかしとはいふがなり聞ゆらしといふべし

○陶淵明詩採菊東籬下悠然見南山

徒らに物を弄べば志を失ふの戒めぞ聞ゆるかし」しかはあれど假初なる事にぞ、ことわりがましく人まねにいらんは又心苦しからずや。籬の菊を手につみて長閑に山のはを望むといひし人は何の心かありけん。是らを味なき味ひなどいはんは尚こころあるに似たりかし」

「風かをる水際になびきて夏はこん。うちまぜの緑り花の白妙」

虎の鰐を取りたる事 宇治拾遺巻三

今は昔。筑紫の人。商ひしに新羅に渡りけるが。あき

○此本原本は隆國卿の作にして今昔物語の拾遺なりといへりされども後人の書かへたるもありて古本は傳はらざるよしなれど弥隆國卿の名も掲げがたし故にしるさず

○古へは九州をすべて筑紫といへり

なひをして帰る道に。山の根にそひて船に水汲入れんとて。水の流出たる所に船をとめて水をくむ。其船に乗りたる者船ばたにかゝりてうつぶして海をみおろせば。山の影うつりたり。高き岸の三四十丈ばかりあまりたる上に虎つゞまり（縮）ゐて物を伺ふ。其かげ水にうつりたり。其時に人々につげて水汲むものを急ぎ乗せて。手毎に櫓を押して急ぎて船を出す。其時に虎躍り下りて船にのれるに。船はとくいづ。虎は落ちくる程のありければ。今一丈ばかりのま残。えとゞきつかで海に陥りぬ。

○來と見ると有るべきをくるとみるとあるを來る事とやいふ歟詞を含みたる文格なり

ふねをこぎていそぎてゆくまゝに。この虎に目を掛けて見る。志ばしばかりありて虎海より出きぬ。泳ぎて陸ざまにあがりて。汀にひらなる石の上にのぼるを見れば。左の前足を膝よりかく。食切られて血あゆ。鰐にくひきられたるなりけり。とみるほどに其切られたる所を水にひたして。平がりゐるを。如何するにかと見るほどに。沖乃かたより。鰐虎の方をさしてくるとみる程に。虎右の前足をもつて鰐の頭に爪を打立てゝ。陸ざまに投上ぐれば。一丈ばかり濱に投上げられぬ。乃け（仰）ざまになりてふためく（快掌）。頤の下を躍りかゝりて食ひて二タ度みたびばかりうちふりて。なよ〳〵となして肩に打かけて。手を立たるやうなる岩の五六丈あるを。三ッの足をもちて。下り坂を奔るがごとく登りてゆけば。船の中なるものどもこれが志わざをみるに。なからは死にいりぬ。船にとびかゝりたらましかば。剣刀を抜きてあふとも。かばかり力強く早からんには。何業をすべきや。おもふに肝心失せて。船こぐ空もなくてなん筑紫にぞかへりけるとかや』

○小松ハ第宅ノ名土御門ノ北ニ在リ光孝天皇誕生ノ所ト云ヘリ

○大納言藤原成親ナリ平氏ヲ滅セント圖レリ

○西宮大臣ハ左大臣高明ナリ博

○小松内府父ヲ諫ム　盛衰記巻五

小松内府（重盛）入道（清盛）ノ許ニ參ジ申給ヒケルハ。大納言ヲ失ハレン事ハ。能々御思案アルベキ事ナリ。『六條修理大夫顯季卿。白川院ニ召仕テヨリ。以來家久シク成リテ。位正二位官大納言迄經上リ。君ノ御糸惜ミモ淺カラザル仁ヲ。忽ニ首ヲ刎ラレン事イカヾ侍ルベキ。唯都ノ外ヘ出サレン（テカ）事足リヌベシ。斯クハ聞食ス𪜈若（シ）僻事ナラバ。彌不便ノ事ニ侍ルベシ。』北野天神ハ時平大臣ノ讒奏ニ依リ。西海ノ浪ニ流サレ。西宮大臣ハ多田新發意（シンボツチ）（満仲）ガ姦訴ニ依リ山陽ノ霧ニ埋ル。各無實ナレドモ流罪セラレ給ヒケリ。皆是延喜ノ聖主。安和ノ御門ノ御僻事トコソ申傳ヘ侍レ。上古猶此ノゴトシ況ンヤ末代ヲヤ。賢王猶誤アリ況ヤ凡夫ヲヤ。委ク御尋モ有リ。能々御案ジモ侍ルベシ。物騒ガシキ事ハ必ズ後悔アリ。既ニカク召置カレヌル上ハ。急ギ失ハレズトモ。何ノ苦ミカ有ルベキ。罪ノ重キヲバ輕クシ。功ノ淺キヲバ重クセヨ。ト云フ本文アリ。』何様ニモ。今夜卒爾ノ死罪然ルベカラズ。ト申サレケレドモ。入道如何ニモ心行カヌ氣（ゲ）ニ宣ヒ

學ニシテ典故ニ通ズ嘗テ西宮記ヲ著ス

○延喜ハ醍醐天皇ナリ

○安和ハ冷泉天皇ナリ

○罪ノ重云云此語常ニ云フ事ナルガ大禹謨ニ在ルゾ起原ナルベキ

○ナガラヘハ存命ヲモ長生ヲモイフ爰ハ長生ナリ

ケレバ。申請フ旨御承引ナクバ。侍一人ニ仰付ケテ。先ツ重盛ガ首刎ラルベシ。亂レタル世ニナガラヘテ。命生キテモ何ノ詮カハ有ルベキ。又重盛彼大納言ノ妹ニ相具シ。維盛又聟ナリ。旁親シク成テ候ヘバ。角申ストヤ思召ルラン。一切其義ハ侍ラズ。世ノ為。家ノ為ノ事ヲ思フテ。歎申バカリナリ。我朝ニハ。嵯峨帝御宇左衛門尉仲成ヲ誅セラレテ。後死罪ヲ止ラレテヨリ。以來二十五代ニ及ビシヲ。少納言入道信西ガ。執權ノ時ニ相當テ。絶テ久シキ例ヲ背キ。保元ノ亂ノ時。多クノ源氏

○左府ハ惡左府頼長ナリ

○田原ハ大和國添上郡ニ在リ

○積善云々易經文言傳ニアリ

○文王ノ四知已ハ南宮括散宜生閎夭大顛ナリ之

平氏ノ首ヲ切リ。宇治ノ左府ノ墓ヲ堀キ。死骸ヲ實驗セシ其報ニヤ。中二年コソ有リシカ。平治ニ事出來テ田原ノ奥ニ。埋メラレタリシ信西ガ堀起サレ。頸ヲ渡シ獄門ノ木ニ懸ラレキ。是ハ朝敵ニアラネドモ。併ナガラ保元ノ罪ノ執ト覺エテ。恐コクコソ侍リシカ。此亦指セル朝敵ニアラズ。旁以テ恐アルベシ。御身ハ御榮華殘ル處ナケレバ。思食置事ナクトモ。子々孫々マデモ繁昌コソアラマホシク侍レ。積善之家必有餘慶。不善之家必有餘殃トコソ承ハレ。サレバ文王ハ太公望ニ。

ヲ四友トモ四鄰トモ云フ　○五奏ハ五議ノ奏ナルベシ太祖張蘊古ヲ殺シテ後五議ヲ用ヰラレタレバナリ　○行善云々出所未ダ探リ得ズ

命ジテ四知己ヲ恐レ、唐太祖ハ、張蘊古ヲ切テ後五奏ヲ用ヰラル、又行善則休徴報之行悪則咎徴隨之、トモ申ス父祖ノ善惡ハ必ズ及子孫、トモイヘリナド様々ニ誘ヒ申サレケレバ、入道餘リニ口解キ立ラレテ、實ニトヤ思ヒ給ヒケン、今夜切ル事ハ止メ給ヒニケリ。

和文軌範巻之一　終